

中学校における現職教育の試み

—各教科研究における共通テーマの設定とその推進—

足利市立第一中学校

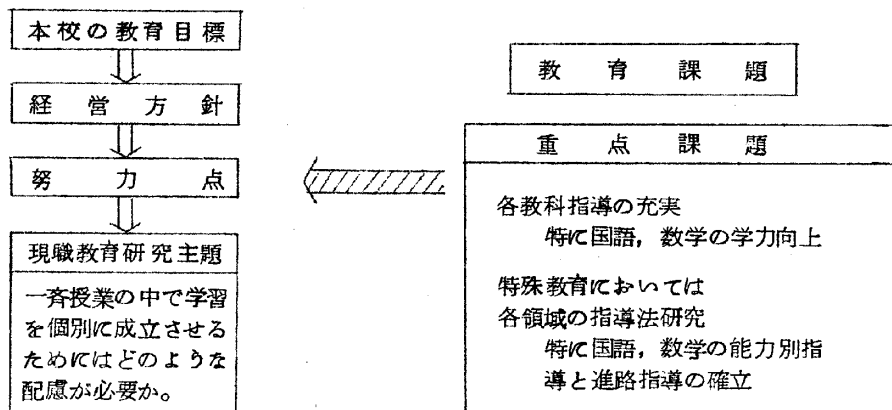
人間の教育は多面的であるはずである。各領域の指導が充実してはじめて、その目標が達成されるものであることは、いまさらいうまでもないことだが、よく考えてみるとその研究の姿勢にはかなり問題があったようである。それは、個々の教材の研究・特別教育活動の研究・あるいは道徳・学校行事等の研究と、それぞれ独立の分野として研究が進められ、教師がある意味での「専門家」になりすぎていたのではないだろうか。いいかえれば、自明のことながら「同一の子ども」を対象にしていることを忘れていた面があったのではないかと反省させられる。

特に、中学校においては教科担任制というたてまえをとっている関係から、その教科内に話し合いや研究が限定される傾向さえ生じ、職員室の中での共通課題の発見が困難になっていることは、多くの教師の等しく経験していることである。また、教科以外の領域についても、問題を校務分掌によりわりあてられた「係」という立場から見る傾向が強く、人間教育の多面性を主体的に受けとめにくくしている点が多々あったと思われる。教科の専門家であることは当然のことであるが、それはどこまでも「人間教育」という基盤の上に立った底辺の広い専門家であるはずである。

くりかえすまでもなく、常に教育の問題は人間教育の視点から考察されなければならないが、これは多数の教師の理念的な共通点であって、実際活動の指針となるような実践的な契機をもったものではない。そこで、本校としては、単に理念だけでなく、毎日の教育実践の中の最も具体的問題に焦点をあわせて、実践活動の強力な契機となるものを「全職員の共通課題」として発見しようと試みたが、そこでとりあげられたのが「学習の個別化」である。しかも、この教科のわくをこえたその根底にある共通的な問題を、おたがいが主体的には握ってきたとき、全職員の個性を十分に生かしながらも調和と統一のある教育活動が展開されるにちがいないという確信に到達した。

以下、その実際について概要を記述することにする。

1. 研究主題及びその分析



- (1) 一斉授業の中で個々の生徒の反応の場を確立強化するために指導過程をどう組織化・合理化していったらよいか。また、個別化と集団化をどのように統合し、学習の成立を促進したらよいか。
- ① 指導過程におけるフィードバックの機構をどう確立したらよいか。
- ア どのような反応の場がだれにされなくてはならないか。
- イ 反応の場をどのように作っていったらよいか……刺激・提示の強化
(発問構造の研究・視聴覚教具利用法等)
- ウ 反応の結果をどのように分析しコントロールしたらよいか。
- ② 生徒の反応をどう組織化し指導過程を構成していったらよいか。
- (2) 一斉授業における進度差に応じた個別指導のプログラミングや指導過程をどう編成していった

月	共通(全職員対象)	国語	社会	数学	理科
	一斉授業の中で、学習を個別に成立させるためには、どのような配慮が必要か	個々の生徒に積極的な参加を促すための学習形態について	思考の系列を明らかにするための発問構造の研究	① シンクロアックス使用による学習の個別化(継続研究) ② 能力に応じた学習主題の与え方について	実験観察指導におけるチェックリストの活用について
4	(現職教育計画作成委員会)				
5	「学習の個別化」についての研究視点を明らかにする指導者 (指導課長・指導主事)				
6			研究視点の定め方 (授業研究) 指導者 (茂呂指導主事)		
7	指導過程におけるフィードバックの機構をどう確立するか① (茂呂指導主事)	話しあいを活発にするためのグループの編成 (能力別ではない)	発問に対する生徒の反応訓練	能力に応じた指導を目標としたシンクロ指導を更に具体的に研究していく。 (計画のため一斉指導との関連) シンクロ指導における課題の与え方に準じて普通授業(家庭学習ふくむ)における課題の与え方を研究する。	チェックリストの内容形式の検討と実践
8		"	思考因子の分析と指導内容との具体的関連について	〇7月に同じ	"
9	指導過程におけるフィードバックの機構をどう確立するか (野田, 時田, 茂呂指導主事)	(7月に同じ)	段階別の発問構造の研究	〇7月に同じ	チェックリストの記入結果を現実の子どもの上でどう生かしていくか

らよいか。

① 進捗差によるグルーピングをどのように構成していったらよいか。

ア 進捗差の発見・分析の方法

イ グループの作り方や運営

② 進捗差に応じたプログラミングはどうあるべきか。

③ 一斉授業の中に個別指導方式を、どう位置づけていったらよいか。

2 研究予定

本校の昭和43年度現職教育計画よりその予定を抜すいと次のとおりである。

音楽	美術	保健体育	技家	英語	特殊教育
基礎能力のソルフェージュの力をつけるための指導について	デザイン学習における発想や構想を高めるための指導について	測定値にもとづいた器械運動陸上競技の個別指導について	実験・実習を効果的にこなすためのグループ指導について	能力別指導について	国語、数学の能力別指導について
		42年度生徒の運動能力の分析			
		43年度段階別運動能力基準(運動能力プロフィール)の設定とその活用	○個々の生徒の能力を調査する。 ○実験実習時におけるグループ内の個々の生徒の理解度を反応カードによっては握する(家)		能力の実態をは握し対応した指導法を研究する
個人の能力の実態をよくつかむ(実技テストとの関係は握)	主題を発見するための動機づけについて	個別学習の要点研究	○リーダーを中心としたグループ指導(実験実習への全員参加)(技・家)	知能テスト、総合テストと英語の力との関係を明らかにする。	
"	"	"	"	"	
話題の与え方(能力にあった)	参考作品のみせ方について	能力別班編成とその指導	○学習カードを利用して学習のねらいと個々の生徒の到達度を研究する(技) ○生徒の積極的な参加を促すための実験実習指導について(家)	能力別グループ編成の方向づけとL.I教室の活用について	教材構造と学習指導法の研究

	共 通(全職員対象)	国 語	社 会	数 学	理 科
10	<p>進度差によるグルーピングやプログラミングはどうかあるべきか</p> <p>(和田, 野田, 茂呂指導主事)</p>	<p>学習内容に応じた指導過程の中でグループの位置づけ</p>	<p>思考の系列を明らかにする。</p>	<p>9月に同じ</p>	<p>チェックリストの内容形式および記入方法の再検討</p> <p>(菊地指導主事)</p>
11	<p>一斉授業の中に個別指導方式をどう位置づけるか</p>	<p>10月に同じ</p>	<p>研究主題にもとづく小単元別カード作成</p>	<p>10月に同じ</p>	<p>実 践 研 究</p>
12		<p>評価とまとめ</p>	<p>研究のまとめ</p>	<p>研究のまとめ</p>	<p>研究のまとめ</p>
1					
2					
3	<p>44年度教育課題の検討</p>				
備考(反省)					

音 楽	美 術	保 体	技 家	英 語	特殊教育
応用について研究させる	個性的発想をのばすための実践研究	主題にもとづく研究授業 (大和田指導主事)	9月に同じ 家庭科 (田中指導員)	能力にあった課題の与え方	9月に同じ
10月に同じ	作品検討		指導法の研究 (主題の実践研究) (野田指導主事)	能力別課題を年間計画の中におりこむ (岡村指導員)	10月に同じ
研究のまとめ	研究のまとめ	研究のまとめ	研究のまとめ	研究のまとめ	ま と め
					研究の反省と今後の方針検討

3 研究の立場

各教科の研究主題については、その設定の趣旨が、いずれも次の「4.各教科ごとの研究」に詳説されているが、その視点(発想)は「1人のこどもも残してはならない」という素朴ながらも「学習の個別化」の真髄を貫く、教育の歴史的な理念の上に立っていることを再認識しておきたい。

わたくしたちは、すくなくとも、この「学習の個別化」という課題を時流にのったテーマとして受けとめているのではなく、毎日の子どもとの真剣な教育活動の必然的な帰結としてとらえたものであることをあらためて強調しておきたい。

しかしながら、日進月歩の今日である。精神的な姿勢だけでは問題の解決はのぞむべくもない。進展する現代教育諸科学の成果や先進諸校の尊い実践研究例を積極的に吸収し、より今日的な問題として本課題に対決していくべきであろう。理念としては教育という営みが始まって以来古いものであっても、その意味するところは現代的な眼をもってとらえていかなければなるまい。

要するに「学習の個別化」は、個人がともすると集団のかけにおしやられてしまいそうなマス・プロ教育から教育本来の姿を呼びもどそうとする第一の課題である。そのためこの課題は、方法論として研究の直接的な対象としてだけあるのではなく、総ての教育活動の場において、誰もが当然いなければならぬひとつの研究理念でもあるはずである。

以上のような基本的な立場をふまえて、全教科研究に着手した。

4 各教科ごとの研究

各教科ごとの研究については、次の国語科以下のまとめを参照願いたい。これらは、すべて全職員に印刷配布した。その意図は次のとおりである。

① 課題に課題を生ませたい。

教育現場の総ての研究課題は、直接、間接の別はあるにしても最終的には「学習の個別化」ということに集約されてくるだろう。

そこで、わたくしたちは、研究の焦点をできるだけボカさないために「一斉授業の改善を通して……」という視点を定めて研究に着手したわけであるが、それでも非常に大きな課題であるため、各教科でとらえたテーマはいずれにしても前述の基本的立場をふまえたうえではあくである。実践と反省の試行錯誤の過程を通して課題が課題を生み問題の核心に迫っていくはずである。

② 教科の専門家だけになりがちな中学校の職員室に共通の建設的な話題を発見したい。

おたがいに「教科」の殻の中にとじこもるべきではない。指導内容は異なっても同一の生徒を対象にしている以上、その指導法には教科相互に学ぶべきところが多いはずである。職員室の、いわゆる「炉辺談話」にまで、よりよい学習指導を求める話題が生まれてくることを期待し続けたい。各教科とも指導内容的なところははぶき、個別化のための試み(方法)に焦点をあわせて記述した意図はここにある。

なお、以下にいくつかの教科の例をあげるが、枚数の関係で教科(特殊教育も含めて)を限定せざるを得なかったのが残念に思われる。

理科

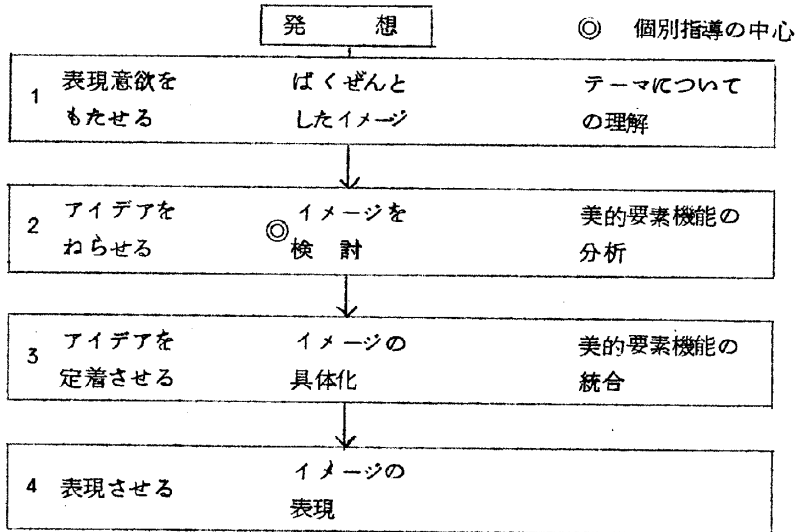
- I 研究主題 一斉授業の中で学習の個別化をどうするか
— 実験・観察指導におけるチェックリストの活用について —
- II 設定理由 一斉授業の中で学習の個別化をはかるためには
目標の個別化 学習内容の個別化 指導過程の個別化
等が考えられるが、指導の結果、学習がどのように成立しているかをたしかめる具体的方法を考えることもたいせつである。その反応のとらえ場所として、チェックリストを用いることとした。
- III 経過 第1期（7月） 形式の検討と実践
第2期（9月） 子どものうえにどのように生かすか。
第3期（10月） 記入方法および内容の再検討
形式：型式1および2（略す）
実験・観察グループの編成方法
等質化した。（理由 ○ 進行の歩調をそろえるため
○ グループ内にリーダーをおき、助手としたかったため）
方法 各クラスとも、はじめに、男女別にグループ数（9つ）だけリーダーをえらぶ。つぎに、残りの生徒を名列により機械的にわける。
記入方法：型式1では、グループ内の生徒のリーダーが記入
型式2では、教師が、記入するグループをきめておこなう。（一種のサンプリング）
記入観点をきめる。
- IV 問題点 ① 質的内容をとらえるためには、学習カードと対応させた記入観点を設けて、記入するとよい。学習カードは、理解過程を予想し、いくつかのステップをきめて内容構成を考える。
② そして、チェックも、「教師が、生徒のだれがその項目について理解していないか」というしかたから「生徒が自分自身で、どのステップにおいてつまずきをもつか」というチェックのしかたにかえていったほうが、より効率よくなるのではないか。
③ いっぽう、指導中の生徒の理解度はあくは、意志表示器等でみたらと思う。（その意志の表示法にも、わかった、わからない、考え中の3通りくらいが示せばよいと思う）
④ たた、理科では、意志表示器のおき場所に適当なところがなくてこまっている。（実験装置との関係で）
- V 今後の対策 型式1および2を発展解消させて、型式3のような、学習カード兼学習ステップのチェック表（個人もち）について引きつづいて研究していく。

美術科

- I 研究主題 デザイン学習において発想を高めるための個別指導
- II 設定理由 本校生徒の制作活動の実態をみると他の領域にくらべて、制作の過程や作品において個人差がきわめて大きい現状であるため、ひとりひとりの発想を豊かにしてやる必要があるのでこのテーマを設定した。

III 研究経過

A 発想指導の位置（指導過程での）



B 個別化のねらい

1. 具体的目的をもった計画的表現をさせる

条件を考えさせ

- 発想の糸口をつくる
- 発想に方向を与える
- 生徒の感覚に働きかける

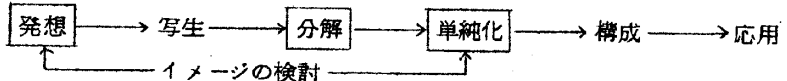
（具体的な思考を通してみちびき出す）

2. 観点をはっきりさせる

- 表現活動の過程で常に生徒に問題意識をもたせる
- 固定化，概念化を防ぎ創意のきっかけを与える
- 思考のすじみちをたてるにじゅうぶんの具体性をもたせる

C 実践指導

各学年の題材配列の関係上テーマについての指導は一年「自然の形から」を対象とした。



1. テーマについて興味，関心の低い生徒は教師の発問によって導く方法と話し合いの場を設けて想をわらせた。
2. 参考作品としてはこの段階ではカラー写真などを利用し，その美しさにふれさせ，ひとりひとりの感動をもとにして想を高めた。
3. しゅう集した資料を整理させ美的要素のは握や機能分析が容易にできるようにことを個別に指

示してやった。

4. イメージの具体化へ進めない生徒にはできるだけ多くの資料を再しゅう集させてみた。
5. アイデアスケッチを何枚も数多くやらせ自分の意図したようにできたかどうか検討させてみた。

(教師の助言)

IV 問題点

1. 生徒自身の学習の計画なり、ねらいなりをもっと具体的にたせざる必要があった。
2. 自由な表現ということで甘やかすことはできないのでどんな作品(過程のものでも)でも保存させ反省の資料としたい。
3. 学習過程における創作活動を重視することが大切である。
4. 個別指導では材料、資料、経験、等により概念化を防ぐため条件を与えて指導することは時間的なむだを省く上からも必要であった。

V 今後の対策

発想指導は偶然の中から条件を捨てることでなく計画的な授業の流れの中で生徒が独創の力をじゅうぶん発揮できる諸条件を取りそろえてやり適切な助言をひとりひとりに与えてやるようにする。

技術・家庭科

I 研究主題 技術・家庭科(男子向)における個別化のくふう

II 設定の理由

技家科のグループ指導において問題となるのは、指導した内容が個々の生徒にどれだけ定着したかをつかむことが困難だということである。

生徒が実験や実習を適確に行なってその中から技能や知識を習得して行くには個々の生徒の活動を教師側が簡単につかめ指導して行けるようなグループ編成のくふうが必要と考えたのである。

III 研究の過程

グループ編成をする場合個々の生徒がグループ内でどのように活動し、どのような位置をしめるかは大いに問題がある。そこで次のような調査とデータを出した。(例3の520名)

A 技術・家庭科への関心度

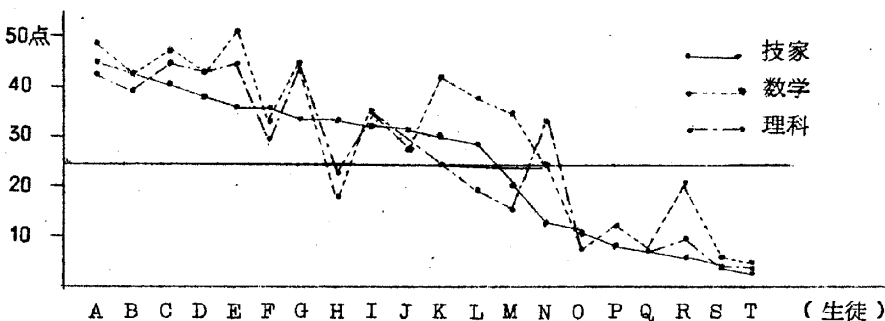
好き	普通	嫌い
5(25%)	15(75%)	0

B 他教科(数・理・英)への興味

数	理	英
3(15%)	8(40%)	9(45%)

C 技家・数学・理科との相関

技家の中でも3年はその内容が数学や理科と多分に関連があると考えられる。特に電気の指導の場合は特にそう考えてもよい。



○ 相関グラフよりの考察

このグラフで考察されるのは3年の電気学習で特に理論的内容については数学・理科とかなり関係があるようである。従ってグループの編成にはそれらの点も考えてみる必要がある。

D 異質グループ内での能力の低い生徒の問題

科目 \ 得点	50～40	30～20	10～0	計
技・家	4	2	3	9
理 科	4	2	4	10
数 学	6	2	3	11

この表より正答50%以下の生徒が約50%いるということはグループ内で約半数が実験や実習に支障なく参加できない状態にあるかのようである。

E 君は誰とグループを組みたいですか? 省略

○ 生徒の希望よりの考察

調査の結果例えば上位の生徒は互いにグループを組みたいと希望しているのに対して、逆に中程度の生徒も同程度の生徒とのグループを望んでいるようであった。中で注意したいのは最下位のT生徒が上位の生徒を希望したのは自分の能力から上位生徒を望み頼りたい気持ちがでておりグループ編成に参考となる。

IV 今後の問題 以上の調査等から技家の指導を支障なく行ない学習効果を上げて行くためには個々の生徒のグループ内での活動を教師ができるだけは握る必要があると考えられる。

技術・家庭科

I 研究主題 家庭科における個別化指導のくふう

II 設定理由

- (1) この教科は実験・実習を通しての学習の場が多いためグループによる指導の場が多い。そのためには個々の生徒の理解度を知り、効果的なグループを編成する必要があると思われる。
- (2) 学習内容の理解できない生徒や進度の遅れている生徒を容易に確認し、その生徒なりの能力に応じた指導を行ない全員学習に参加できるようにくふうする。
- (3) 普通教室の授業形態の場においては、能力別に与える課題をくふうしこれを用意する必要があると考える。

III 研究結果

(1) 異質グループの編成

グループ8班編成し、リーダーを中心とした指導により効果をあげるための1歩をあゆみ初めた。

- (2) 生徒各自に反応箱(三角形)を用意させた。これを使用することにより学習内容の理解できないもの、あるいは進度の遅れているものを容易に確認できるようになり個々の能力に応じた指導がその場で行なうことができる。

(この場合、他の生徒に課題を与え、時間を空費させてはならない。)

- (3) 課題を3～5段階に分け、その時間の指導の重点的な内容に対する思考、実践、の課題を計画しこれを用意するようにした。

IV 問題点

- (1) 個々に応じた指導を効果的にするために他の生徒に時間を空費させてはならないと考えるが、しかし実習の場合はなかなかむずかしい。その場合に応じた課題を他の生徒に与えられるためには教師の力が相当必要である。

- (2) 能力を平均したグループ編成が効果的であることは当然ではあるが、生徒の精神的に与えるものが大きいのではなからうか。この点これでよいのだろうかと不安である。

V 今後の対策

指導内容の到達度と評価の方法

- グループ内で(学習内容によっては)実験・実習が完全に行われたか?
- ① 能力が低くてできない生徒
 - ② 見ただけで実験しない生徒
 - ③ 有能なリーダーがいるグループでは、リーダー中心となりがちとなり他に影響を与える場合が多い。
- 何もしない生徒、見ただけで終わりにする生徒に学習意欲を起させ自主的にたえず学習する場に置きつづける方法としてステップの細かいシート作りをくふう研究したいと考える。

英語科

I 研究主題

- ・個別化を配慮した学習方式
- ・学習成立をたしかめるための個人カード

II 設定理由

英語の学習は特に定着の累積を必要とする教科であり、ある一点のつまずきを生じた生徒はその先の学習は困難となる。その結果生徒間の能力の差が他教科に比べて著しく生じてくる。こうした障害をのぞくために学習が成立したかどうか個別にあたる必要がある。そのための具体的事項として上記の2点を取りあげた。

III 経過

1 個別化を配慮した学習方式について

※まず個人の能力を知る必要がある。

(1) 何によって能力とするか

知能検査の結果の偏差値を学年を通して一覧表にし努力のあとと同じように10段階にした。(最高1 最低10)

一斉テスト 2回の10段階評価 (最高2 最低20)

英語の力 総合的な結果の10段階評価 (最高2 最低20)

(2) 能力の算出方法

知能偏差値・総合学力・英語の力を1:2:2とし最高5最低50(カードを作り順位をきめる)

(3) グループ作り

② 能力のにている者のあつまり

A=上より12名 B=次の12名 C=次の10名 D=次の6~8名

③ 能力のちがう者のあつまり(4人グループ)

1クラス10~11の3~5人(原則4人)のグループ、その合計の力はできるだけ同じになるようにし、男だけ女だけにかたよらないようにした。最高のものをグループリーダーとした。

④ 普通教室における縦の列を班とした。これは学活における生活班と一致させ、常にグループの一員として努力し助けあうようにしむけた。

④ ワークブックの採点のためのグループ

(4) グループのつかいわけ(省略)

2 学習の成立をたしかめるための個人カード

(1) テストつくり

- ・テストはそのつど学年を通して相対評価し印をおして(優・良上・良・良下・可)返し、テストNo, テストの返された日・得点・評価を記入する用紙を作成しとじさせる。

- 父兄との連絡のいみで父兄印の欄を作る。
 - 必要に応じて整理ができていないか検印をおす。
- (2) ワークブックの記録 (d型グループによって採点整理される)
- テストつどりの右にワークの記録を一目でわかるように記録する。
- 頁・得点 $\frac{x}{x}$ ・評価 ABC 完全には◎ 1つちがいの○
- ↑
絶対評価

☆学期末に個人面接の資料につかたさらに読むことや話すことの記録がほしいと思った。そこで個人カードを作った。(実物参照)

- (3) 個人カード (b型グループによって記録が行なわれる)
- 新出文字 (よめるか、英単語をみて日本語訳が云えるか、……など)
 - 基本文型 (略)
 - 本文のよみ (略)
 - ワーク (頁でなく課をまとめて)
 - ノート (個別化につながるノート指導・課ごとに検閲して評価 A・B・C)
 - L・L (略)
 - その他のテスト
 - 朝の学習

上記の点について各個人ごとに一枚の用紙に結果を記入する。

IV 問題点

- 能力別に課題をあたえることについてたいして大きな抵抗をかんじる。
- 能力的な格づけをしたくないという反面、できる子をもっと伸ばすための努力がたりないと思っている。
- 時間的な余裕が少なすぎる。
- L・L教室の活用による能力にあった指導の形態はどうしたらよいか。
- 聞く力・話す力を記録する方法と形式はどうあるべきか。

V 対策 (省略)

研究の概要については以上のとおりであるが、これら各教科の課題はさらに分化し、あるいは総合され、断絶することなく中心となる課題のもとに発展させていきたい。

なお、この記録は、本校現職教育係山崎政三教諭の記録をもとにして編集したものである。

評

第一中学校の現職教育を支えている基本的な考え方は、前文にも述べられておるように、「中学校の教師はある意味では専門家になりすぎている。もっと人間教育という基盤にたつた底辺の広い専門家になる必要がある。そのため全職員で共通課題を設定し研修を進めよう。」というもののようと思われる。まことに透徹した考え方であり、まずは敬意を表したい。さらに「学習の個別化」という現代教育の基本的課題の一つに取り組み、各教科のそれぞれの特質に応じた研修活動を展開しながらも、共通課題に向って全職員が調和と統一をもった歩みを続けてこられたことが、各教科の実践記録の中に伺える。今後の成果を大いに期待したい。なお、本記録を読まれた方には、その理念と実践を検討され、じゅうぶん参考にしていただければ幸いと考えている。最後に、この記録の中には実践例が紙数の関係で数教科しか掲載できなかったのが残念であるが、他の教科の研究も非常に充実しているので、関心のある方は是非一中に問い合わせられたい。